

奄美群島徳之島における空間利用及びワークショップ運営の研究

ー徳之島アートプロジェクトを通してー

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部 建築学科 教授)

1. 研究課題

2014年7月26日～8月31日、鹿児島県奄美群島の徳之島において「徳之島アートプロジェクト 奄美の島の芸術祭 2014」が実施され、古谷研究室ではワークショップの企画や運営、作品出展を行った。

徳之島は、離島という環境の中、農業問題、高齢化、過疎化など多くの問題に直面しており、現在、その独自性が失われようとしている。徳之島の生活環境が活性化していくためには、島民自身が、徳之島の魅力や特徴を再発見、再確認することが必要である。本アートプロジェクトは、徳之島の北から南まで、各地に現代アートを展示することで島全体を包み込むような試みを展開している。島民が展示物をめぐったり、島外から訪れた人の気づきを通して、自らが島の魅力を再発見することの一助となることを目的としている。

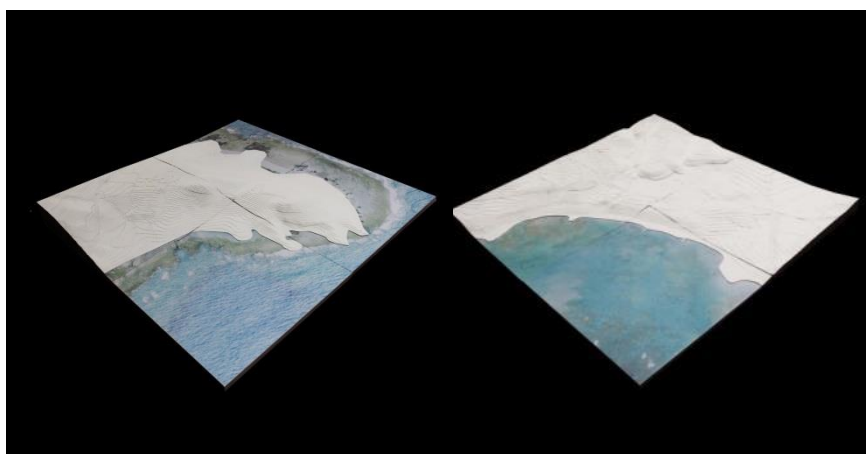
2. 主な研究成果

具体的には、古谷研究室では以下のワークショップ、作品制作を行った。

- ・2箇所の集落における、模型を使用したワークショップ、意見交換会
- ・やぐらの作品制作

2.1 模型ワークショップ

2013年夏に行った集落調査をもとに、2箇所の集落（金見集落、面縄集落）の模型を製作した。その模型を使用し、住民の方を対象としたワークショップを行った。



(左) 金見集落模型 (右) 面縄集落模型



ワークショップのチラシ作成

ワークショップでは、白い模型に着色をしたり、住民ひとりひとりが知っている集落の歴史や知識を模型に書き込んだ。集落の歴史、そして現在の様子について、多くの住民と話しながら模型を完成させていった。ワークショップ最終日には、完成した模型を見ながら住民とともに集落のこれからについて、話し合う意見交換会を実施した。

このワークショップを通し、集落の魅力、特徴の再発見につながることを目的としている。完成した集落模型は両集落に寄贈した。集落の記憶を記録として残すと同時に、この模型を使い、大人から子供へ、集落の歴史を語り継ぐきっかけが増えていくことが期待できる。



ワークショップ前の白模型



ワークショップの様子



面縄集落模型完成



金見集落模型完成



模型に記憶の端を立てる



意見交換会の様子

2.2 やぐら製作

徳之島では昔から大きな木にやぐらと呼ばれる足場をつくり、そこで涼んだり、子どもたちが遊んでいたという。今はほとんどなくなってしまったこのやぐらの考えに基づき、現代のやぐらの提案を行なった。

面縄集落公民館前に、やぐらを製作した。大きな木の下で涼むことができるような空間を目指した。このやぐらは折りたたみ、持ち運ぶことができるようになっている。これにより、海辺にやぐらを移動させることが可能である。

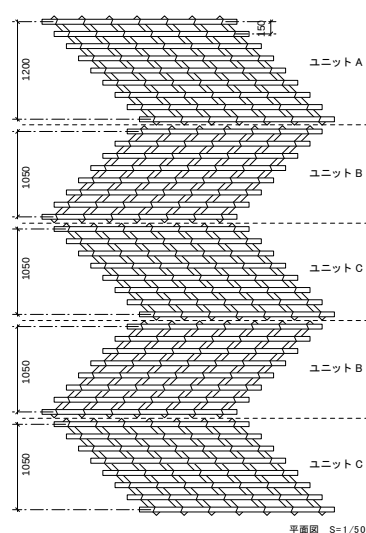
やぐらの材料はすべて徳之島にあるものを使用しており、住民自身によるメンテナンスが可能なるよう、紐で木をくくっていく簡易な構法とした。また、やぐらに座る際に使用する座布団も、集落の住民とともに製作した。徳之島で昔から作られる編み方でもって藁を編みこんで製作した。

完成後は、集落の方とお披露目会や懇親会を行った。

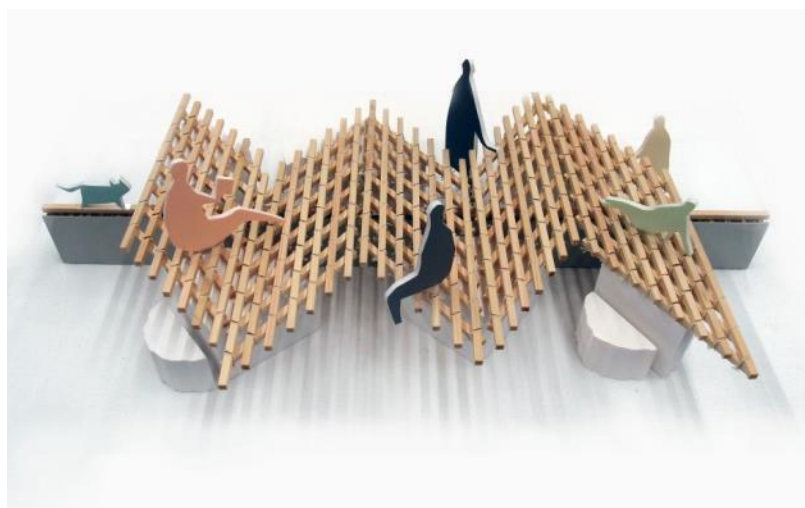
今後は、集落行事での使用はもちろん、日常的にやぐらで涼んだり会話をするなど、集落の住民が集まることの出来る場所として、自由な使用が可能である。



やぐら製作のチラシ作成



平面図



模型製作



やぐら製作風景



座布団を編む様子

3. 共同研究者

斎藤 信吾（創造理工学部・助手）

根本 友樹（創造理工学部・助手）

4. 研究活動の課題と今後の展望

模型着色ワークショップや意見交換会により、集落内のいたる場所に名前がつけられていることが分かったが、それらのほとんどの名前は下の世代へ伝えられていない。徳之島特有の発音は表記が難しく、音声による記録が必要であると考えられる。今後も、引き続き集落の記憶を記録化していくことを目指していきたい。

またさらに、近年、金見集落、面縄集落ともに空家や空地が増加している。今後はこれらの遊休施設、空地の活用方法についても検討する必要がある。

徳之島は今後、世界自然遺産登録に向けて観光地化のための計画が行われる。島の住民がいかにして観光地化を受け入れていけるかを考えながら、上記の研究活動を行なっていく。



やぐら完成写真



やぐら完成写真



やぐら完成写真



住民とのやぐらお披露目会



空き家の増加



面縄集落では空地も増加している

小豆島町堀越地区における予備調査実施報告書

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部 建築学科 教授)

1. 研究課題

本事業では、高齢化、空き家の増加が進む一方で移住者の転入が見られる香川県小豆郡小豆島町堀越地区において、堀越地区が今後どのような地区になっていくべきかを住民と検討し、現在全国的な問題となっている空き家活用の手法やデザイン提案を行うことを目的とする。

2. 主な研究成果

2.1 香川県小豆島町堀越地区について

堀越地区は、人口総数91人、高齢化率51%の過疎地域である。しかし、総世帯数45のうち、6世帯は移住者の世帯である(2013年度調査当時)。そのうち4世帯が空き家バンクを利用し移住した世帯であり、残りの2世帯は空き家バンクを使用せず空き家へ移住した世帯である。このようにこの地区は移住者による空き家活用が他地域と比較して積極的に行われている。

堀越地区は南北の海に向かって斜面した土地に住戸が立ち並び、南岸の西奥には荒神社と小豆島遍路五番札所の堀越庵、隣接して堀越分校跡が並ぶという構成になっている。道路は最も南側の海沿いにある浜道が主要な動線となっており、そこから小さな道が斜面に向かって伸びているという構成である。



小豆島町堀越地区の位置



堀越地区概要

2.2 フェーズ別提案

全体計画として提案を毎回単発で行うのではなく、堀越地区内に提案からフィードバックまでの流れが継続する提案とする。その地区のリソースであり問題の1つでもある空き家をいかに活用しつつ町を更新していくかを考える。以下にそのフェーズを示す。

第1期：堀越の魅力・問題の「発見」

第2期：堀越の魅力・問題の「共有」

第3期：堀越の魅力・問題の「改善・発展」

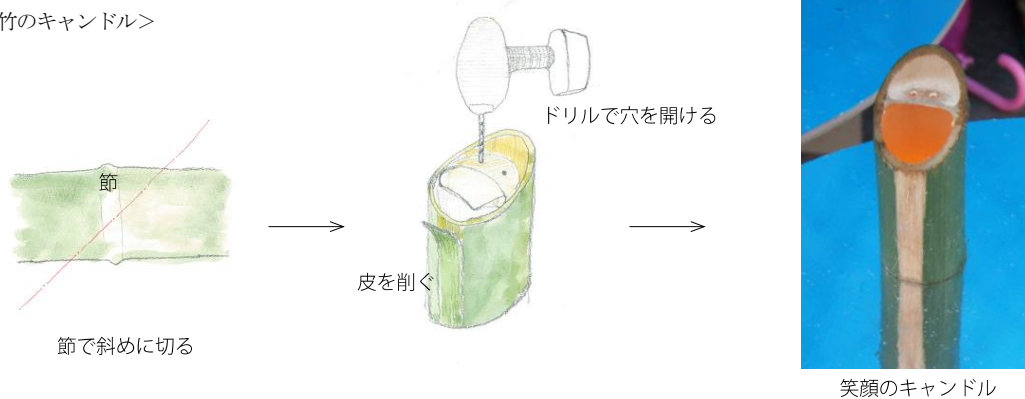
第4期：堀越における新たな価値の「提案」

□ 納涼祭での提案

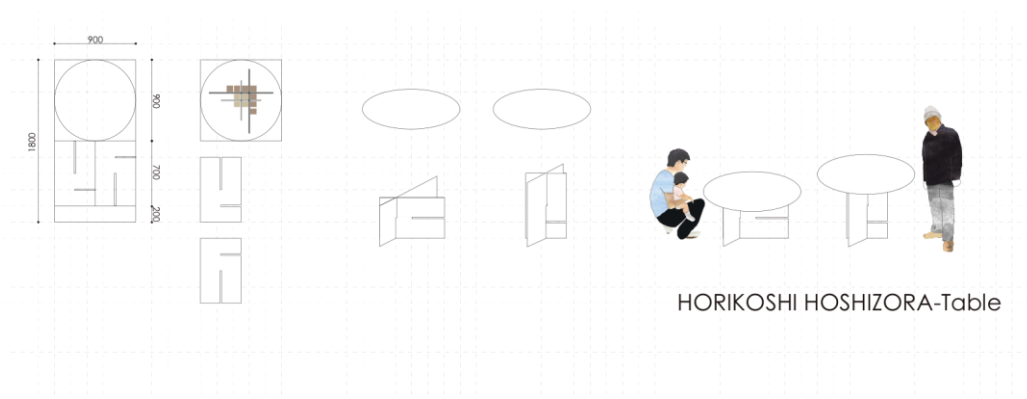
堀越地区の夏祭りである「納涼祭ビアガーデン」において、フェーズ別提案のうち「竹のキャンドル」「堀越星空テーブル」の試作を行った。

- ・ 竹のキャンドル：昔から醤油樽の箍として利用される堀越地区の竹を使用し、納涼祭に訪れる人の誘導灯を制作した。訪れる人に笑顔になってほしいという意味を込め竹が笑っているようなデザインとした。
- ・ 堀越星空テーブル：街灯の少ない堀越地区は夜真っ暗になる。この魅力を活かして星空を映すテーブルの提案を行った。納涼祭で使用する際座卓・立卓両用となるように脚部分に工夫をした。

<竹のキャンドル>



<堀越星空テーブル>



2.3 未来の堀越分校プロジェクト提案

□堀越分校と教員住宅

住民へのヒアリングの中でかつて堀越地区には「二十四の瞳」にも登場した分校があったこと、その分校の存在が子供達や地域の結束に繋がっていた事が分かった。分校自体は取り壊され広場が残るのみであるが、教員住宅は現存し、空き家となっている。

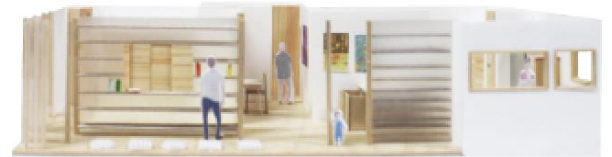
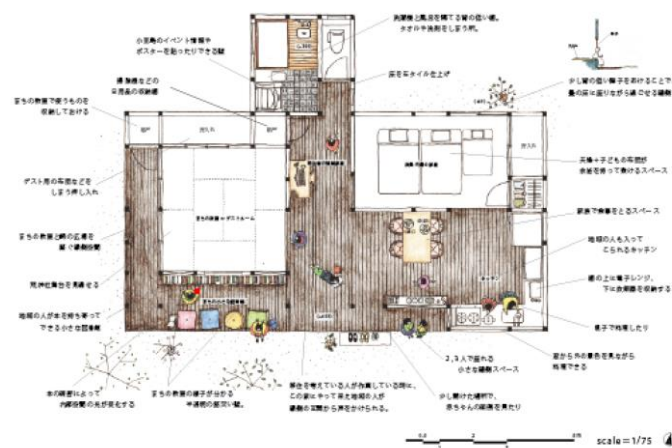
□未来の堀越分校

教員住宅の改修をきっかけに、地区の空き家活用方法を模索し、堀越地区が新たな住民を受け入れながら継続していく道筋を考える。その際意見交換会のなかで出された「暮らしを学ぶ場」「訪れた人が堀越の文化を学ぶ場」「新住民と地域住民の交流拠点」「子供達の間」の4つの機能を持つ場とする。

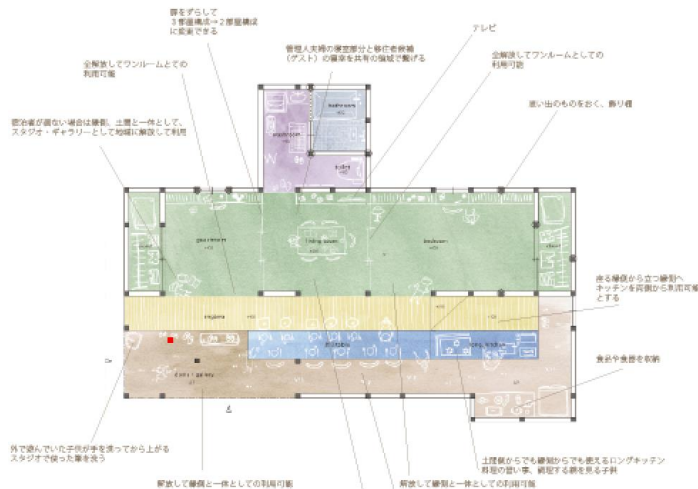
□教員住宅改修提案

上記4つの場を計画するにあたり、「縁側」「土間」という2つの場を取り入れたデザイン計画を行った。来た人が中の様子を伺え、また中の明かりが外に見える様、内と外の関係の曖昧な空間を作る事を考えた。

<縁側案>



<土間案>



3. 共同研究者

斎藤 信吾（創造理工学部・助手）

根本 友樹（創造理工学部・助手）

4. 研究活動の課題と展望

全堀越会での意見交換会において地域住民より得られた課題点を以下に列挙する。今後プロジェクトを進めていく上で重要な指針であり、反映を目指す。

4.1 提案に対する留意点

□立地の問題について

教員住宅は現在地区の中でも比較的高所にあり、高齢者の中にはアクセスへの懸念を示す者も多い。その意見に対しこの場で活動を行っていく理由を共有する必要がある。

□地区のビジョンの共有

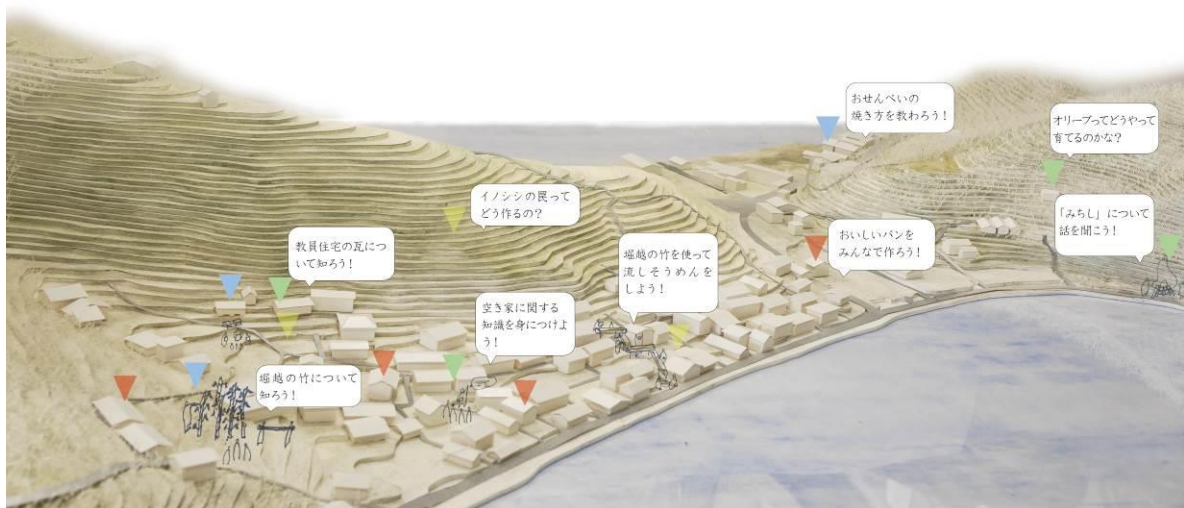
今後の地区の継続の仕方を住民と共有しつつ活動を進めていく必要がある。そのためにはワークショップ形式をとるなど、住民が意見を発しやすい場作りを作る事が必要である。

□子供のための場について

意見交換会のなかで、堀越地区だけでなく他地区においても子供の遊ぶ場所が少ないという意見があった。今後移住者を受け入れながら町づくりを進めていく上で、子供を育てる環境については考慮すべき点である。

4.2 今後の進め方

今後も地域住民、行政、早稲田大学古谷誠章研究室の三者で協力しながら、意見交換会の中で将来の堀越地区の姿を具体化していく。意見交換会が続いていく中で、その会自体が未来の堀越分校の授業へと変わっていくことを考える。意見交換会に参加する事で、堀越の歴史や人と触れる機会になるよう企画を続けるとともに、空き家を活用した地域更新の手がかりとなるようなデザイン提案をしたい。



教員住宅をきっかけとした未来の堀越分校のマスタープラン